Trinity

キズナエピソード\_大鳥丹\_02

------------------------------------------

//背景:渋谷

//ビジュアルノベル形式開始

連絡先を交換した翌週、

丹から律儀にもお礼をしたいと連絡があり、

2人で食事をした。

その後も何度かデートを重ね、

気づけば毎日のように連絡を取り合う仲にまで

発展していた。

//ビジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［丹］

「んん～っ！

やっぱりここのパンケーキ、本当に美味しいです！

幸せ……♪」

［とびお］

「そうだな。

もう4回くらい来てるけど、全然飽きない」

［丹］

「あら？　私はまだ3回しか来てませんけど……

残り1回は誰と……？」

//2行目から静かに怒っている

//SE：ゴゴゴゴ

［丹］

「もしかして……昨日の夜、

返信が遅かったのは、

私に黙って誰かと会っていたのでは……？」

//静かに怒っている

//SE：ゴゴゴゴ

［とびお］

「あ、いやそんな……ちがうって！

昨日はテスト勉強してたし、店に来た正確な回数

覚えてなかっただけだよ……！」

［丹］

「うふふ、冗談です♪」

［とびお］

「！　くそ～……

イヤな汗かいた……」

［とびお］

「なあそういえば、

丹が連絡くれるのって、なんで夜ばっかりなんだ？」

［丹］

「それはすみません、

生徒会の業務が忙しい日が続くと、

どうしても帰りが夜遅くになってしまうんです」

［とびお］

「……ならしょうがないと思うけど、

そういう時間にあんな道通るから、

変な奴に絡まれたりするんじゃないか？」

［丹］

「とびおくんと会った時の事ですね。

あの人は前に少しだけ、一緒に遊んだだけなのに、

勝手に本気になられてしまって……」

［とびお］

「少し遊んだって？

俺と会ってるみたいにってことか？」

［丹］

「とびおくんとは違います。

泊まる所がなくて、

泊めてもらっただけなので」

［とびお］

「泊まる所がないってどういうことだよ……？」

［丹］

「んー……どこから話せばいいかしら……」

［丹］

「実は……家に少し、複雑な事情がありまして、

私は一時期、

全く自宅に帰っていない生活を送っていました……」

［丹］

「その時期はよく、街で声をかけてくる男性や、

時には自分から男性に声をかけて、

お家に泊めてもらっていました。」

［丹］

「家まで行けば、当然皆さん求めてきますから、

それにお応えしているうちに、

男性に悦んでもらえるのが楽しくなっていって」

［丹］

「最後の方は、自分の家に帰りたくないだけなのか、

そうした関係を結び続けていたいのか

わからなくなっていました。」

［丹］

「とびおくんと出会った時の人は、

その時期に泊めてくれた人の1人です」

［とびお］

「…………」

［丹］

「……すごく恐い顔……。

やっぱりイヤですよね、

聞きたくありませんよね……こんな話」

［とびお］

「……はあ、俺は別にイヤじゃないし、

丹の過去に何があったかなんて正直どうでもいい

色々詮索して、話したくないことまで言わせて、悪かった」

［丹］

「　！

い、いえ？　話したくないことだったら

話しませんよ？」

［丹］

「……聞かれたから答えただけなのに……。

変な人……」

//どうしていいかわからず小声

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

俺の返答に、丹が一瞬キョトンとしたような表情を見せたのを

俺は見逃さなかった。

その語、彼女は明るく振る舞っていたが、

その笑顔はどこか少しぎこちなかった。

今日はそれで解散したが、

丹は俺の言葉をどう受け取っていたのだろう。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話終了